

遭難対策訓練（冬）雪崩捜索訓練 報告

さいたま市山岳連盟
遭難対策委員会

日時 : 平成 23 年 1 月 23 日 (日)
場所 : 谷川岳 登山指導センター周辺
講師 : 埼玉県山岳連盟遭難対策部長 瀬藤 武 氏
受講人数 : 21 名

<講習内容>

1. 配布資料に基づき、短時間の講義の後、指導センター前道路において、発信用ビーコン 1 台をセットし、そこから、自分のビーコンが発信源から何メートルまで受信できるかを探知距離をテストした。前回（平成 20 年度）の時も同様であったが、自分のビーコンが発信状態になっていることに気付かないケースがあり若干の混乱があった。概略的には、デジタルタイプよりもアナログタイプの方が受信距離自体は長いとのことである。
2. 斜面に移動し、埋没者捜索の実技講習を行った。
 - ・ 受講生に実際に半身埋まってもらい、雪面上からプローブを挿し、埋没者の身体にあたった場合の感触を体感した。
 - ・ その後、班毎に分かれ、発信用ビーコンのセット、捜索、見学、を交代しながら訓練した。
 - ・ 次の段階として、班毎でリーダーを決め、リーダー、ビーコン捜索、プローブ担当、スコップ担当と役割分担し、捜索訓練を行った。

<解説>

- ・ ビーコンは埋没者の直近まで絞れたら、身体から外し、地面に擦り付けるようして反応をみる。
- ・ 雪を掻き出す際には、掘削箇所を頂点として谷側に三角に配置をとり、目標箇所を掘削者の掻き出す雪を谷側の 2 名が更に下に掻き出す（V 字掘出方法）ようにすると効率的。
- ・ 埋没者の身体の大半を掘り出しても、埋まっている部位を無理に引き出したりせずに、全て掘り出すようにする。
- ・ 埋没者を確認しても、直ぐに雪中から掘り出すと、外気に触れ余計体温を奪われる場合があるので、直ぐには出さず、雪中から出すと同時にツェルトでくるむよう努める。

<感想>

- ・ 個人的には、最もシンプルなアナログの距離が出ないタイプを使用しており、このタイプだと直近までは、比較的スムーズに絞り込めたが、埋没者の近くになり、8m のレンジから 0-2m のレンジに切り替えると、反応が無くなり、そこから実際に埋

没者にあたるまでの搜索が難航して辿り着けないでいると、デジタル機を持った搜索者が先に発見するというケースが多かったと感じた。

- 全体的な感想としては、一昨年（平成 20 年度）に実施した時よりも、搜索のスピードが速くなっていると感じた。繰り返し訓練を実施することで、ビーコンによる搜索のコツを体得しているという感じがする。ビーコンの性能を実感し、それを信じて搜索することで発見が早まるという構図が成り立っていると感じられた。搜索訓練の機会を多くすることが大事であり、冬山や春山の合宿等で時間の余裕のある時に練習してみると、その分だけ、ビーコン操作への慣れ、搜索スピードのアップができると思われる。

3. 雪崩埋没者搜索の終了後、ツェルトを用いた搬出の訓練を行った。

雪面に横になって数十分も立つと、元気な者でも体温を奪われ消耗した。雪崩埋没により低体温状態になっている場合には、生死に関わりかねないので、搬出にあたっては、被搬送者の十分な保温が肝要であると感じた。

以上